

まちやむら、そこに暮らす人びと(=ざいち)の、
知恵や生きる力(=ち)に学び、実践する活動です。

ざいちのち

実践型地域研究ニューズレター No.7 2009年5月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所

「在りて都市をつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市保津町 古浜

守山フィールドステーション

守山フィールドステーションへようこそ！ “梅田町ホタル通り”

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

マンション群に舞うホタル “梅田町ホタル通り”

初夏の夕暮れどき、守山市梅田町に明かりがポツポツと灯り始める頃、ホタルが一斉に光り始めます。

滋賀県最大の河川である野洲川のデルタに位置する守山市は、その分流が多いのです。梅田町にも水質の良い小河川が多く、マンションの林を縫うように流れています。これがゲンジボタルの生息地なのです。その一角に、守山フィールドステーション（以下、守山 FS と記す）があります。



ホタルが生息する河川。守山 FS の横を流れている。

ホタル通り商店街

梅田町は JR 守山駅前一帯の地域で、いわゆる中心市街地にあります。京都や大阪のベッドタウンに最適なことから、梅田町には高層マンションが立ち並ぶようになりました。今日も、マンションを建設する音が聞こえてきます。そんな梅田町に、小さな商店が軒を連ねる通りが一本あります。ホタル通り商店街です。子供達が真剣に 10 円や 20 円のお菓子を



ホタル通り商店街の様子。

選ぶ店、ガラス棚に色々なおかずが並ぶ食堂、ゲーム台のある喫茶店。守山 FS は、この商店街から路地を少し入った所にあります。

隣人で、私たちの研究協力者でもある井上純作さんは、この商店街の帽子屋の息子さんでした。「昔は本当に賑やかやった。うちの向かいには靴屋があって、そこで碁を習った。隣は洋服店。果物屋も魚屋もあった。『3丁目の夕日』は、ここにもあったんやで」と言われます。

守山フィールドステーション

2008年10月にスタートした守山 FS では、すぐに、守山市のまちづくりの中核を担う株式会社みらいもりやま 21、市役所、そして地域住民の方々との研究会が始まりました。守山のまちづくりにあたって、この地域に潜在する歴史文化や歴史資産を再認識するための会です。また、朽木・亀岡 FS との定例研究会、琵琶湖漁師の戸田さんを講師に招いた講習会や、野洲川についての勉強会も始まりました。そういった慌しさの中で迎えた年末の深夜、「カーンカーン、火の用心！！」と、ものすごく威勢の良い声と拍子木の音が、冷たい深夜の空気に響いていました。梅田町恒例の夜警だそうで、「良いまちで研究ができる」と思った瞬間でした。

2009年度

昨年度から始まった研究会、勉強会は、4月に入ってそれぞれに新たな局面を迎えようとしています。随時、このニューズレターでもお伝えしていこうと考えています。ですが、百聞は一見にしかず。興味を持たれた方はぜひ一度、守山 FS へお越しください。琵琶湖と川とまちについて、一緒に考えていただけると嬉しいです。



守山フィールドステーションは、この看板が目印です。

朽木F S、春の便り

火野山ひろば／あいあいネット 島上宗子

黒澤明の『七人の侍』をご覧になったこと、ありますか？ 1954年の映画ですが、インドネシアのNGOの友人たちの間では今も人気です。七人の侍たちに自分たちNGOの役割を重ね合わせているようです。そうした意味で見直してみるのもおもしろいですが、私にとって強く印象に残ったのは、舞台となった村の周りに広がる草山の風景です。

「村の人は、草山が木山になるのを嫌ったんやで」。朽木に暮らして来た今北哲也さん（朽木FS研究員）の言です。30～40代以下の世代にとっては、スギやヒノキが植林された山の姿が当たり前で、山の仕事といえば林業といったイメージが強くなっていますが、かつて山の姿、山の利用のあり方はもっと多様であったようです。田んぼの肥草(こえぐさ)をとったホトラヤマや屋根葺きのカヤを刈るカヤダイラは、毎年火を入れることで草刈り山として維持されてきました。そこには「ツツジ、クサボケ、イバラ、キイチゴ、イタドリ、ウド、ゼンマイ、ワラビ、フキ等々、枚挙に暇ないにぎやかな親しい草波があった」といいます（本ニューズレター2月号参照）。山に火を入れることで賑やかで親しみのある「くらしの森」を取り戻したい。そんな思いで進めている朽木F Sの最近の動きを二つご報告します。

■カヤダイラ、そしてホトラヤマの復元作業（椋川）

カヤダイラの造成を元・今津西小学校椋川分校（現・ECC学園高校）裏の斜面で進めています。掘り起こした原野のカヤ株を年末に移植。雪が解けた3月から4月にかけて、ヒノキの間伐材の焼き杭を支柱に打ち込んで鹿除けネットを設置し、5月の連休中には昨年末に続いてカヤの植え込みを行いました。林道工事の残土で埋め立てられた谷合斜面は、石がゴロゴロしていて固く、重機で穴をあけ、堆肥を混ぜながら一つ一つカヤ株を植えていきます。すくすくとカヤが育ったら、来秋にはカヤを刈



ヒノキの間伐材の皮をむき、焼き杭をつくる。



カヤ株植えに飛び入り参加してくれた、NGO あいあいネット事務局の高田さん。

れるかな、と期待しています。その後火入れをし、火入れ後に育ったカヤとそうでないカヤの比較を行う予定です。

■湖北・余呉での焼畑

琵琶湖の北、余呉町摺墨（するすみ）周辺は、1960年代頃まで、焼畑で在来のヤマカブラの栽培がおこなわれてきた地域です。焼畑は途絶えていましたが、休耕田などでヤマカブラの種を守り続けてこられた摺墨山菜加工組合の永井邦太郎さんと火野山ひろば（「くらしの森」づくりの実践グループ）との出会いがきっかけとなって、2年前に山の火入れが復活しました。私たちは焼畑作業に参加しながら山の恵みを活かす知恵と経験を教えていただいています。

永井さんのご紹介で余呉町の菅並（すがなみ）集落の共有林（現在、菅並の生産森林組合が管理）の一角（約二反）をお借りできました。40年ほど前まで菅並の方々が柴や薪を採ってきたタキモンの山です。5月から6月にかけて伐倒し、8月にはいよいよ火入れの予定です。



8月に火入れ予定の菅並の山。

亀岡フィールドステーション

亀岡の農業と自然（２）「保津川の湧水」

京都学園大学 大西信弘

川の水がどこから来るのか考えてみたことがあるだろうか？ 保津川に限った話ではないが、川の水のすべてが上流から流れてきているかのように思える。しかし、川の中をよく見てみると、川底の砂が吹き上げられている場所があり、浸透水が湧き出ているのを見ることができる。

保津川の湧水が出ている場所では、春になると、農家の方が畑でとれたネギを洗う姿を見ることができる。それだけではない。昨年、12月に NPO 法人プロジェクト保津川で、恒例（といっても2回目だけれど）の川魚食文化を体験する環境教室を開いたとき、地元の川漁師さんが寒バヤ（オイカワ）を獲りにきたのもこの湧水が出ている場所だった。漁師さんがすず網（刺し網）をかけると、魚が鈴なりに獲れるほど、たくさんのハヤが集まっている場所である。

この湧水を利用しているのは、人と魚だけではないらしい。冬鳥であるクイナやベニマシコなどもこの湧水の近くで見かける。温かい湧水のまわりは冬越しをする動物たちにとっても重要な環境なのかもしれない。北に渡る途中のヒレンジャクも、湧水に立ち寄っているようだ。

川の中から水が湧き出ているので、ぱっと見ただけではなかなか気づきにくいですが、人も魚も鳥も湧水に依存して暮らしている。野菜を洗ったり、川魚を獲ったりすることで、こうした環境が維持されてき



保津川のオイカワ。亀岡では、ハヤと呼ばれ、11月、12月頃、寒くなった時期には脂がのって、寒バヤとして好まれる。網から外したときに、おなかを指で押し独特の方法で内臓を抜く。(2007年10月6日撮影)

たのだろうか？ こういった川の利用が今後も湧水を維持していくことにつながるのだろうか？ 川に入る機会や川の水に触れる機会があれば、冬は温かく、夏は冷たい湧水を体験するのは簡単なことなのだろうが、こうした川との接点を失いつつある現代では、失われたことすら気づかれることの無い環境なのかもしれない。



保津川の湧水で冬越しをしたクイナ。京都府では絶滅危惧種に指定されている。驚くほど透明な水が湧水の水質を物語る。(2009年3月31日撮影)



冬鳥のベニマシコ。湧水は、保津川周辺に暮らす生き物の生息場所に大きな影響を与えているのではないだろうか。(2009年3月31日撮影)



3月、北に渡る途中に保津川の湧水周辺に立ち寄ったヒレンジャク。(2009年3月27日撮影)

催しのご案内

■第12回 定例研究会

1. 日時：平成21年5月29日（金）16:00-18:00
2. 場所：小森バイオ研究所（滋賀県大津市真野大野1-6）

環境サステナビリティのためのローカル・ノレッジを用いた琵琶湖の漁業を見学しました 天理大学 アミ・アミナ・ムティア

琵琶湖の漁業におけるローカル・ノレッジを知るため、私は琵琶湖のエリ漁業を用いた漁法を見学しました。エリ漁業とは小型定置網漁の一種で、湖岸から沖合に向かい矢印型に網を張り、湖岸によってきた魚の習性をうまく利用して、「つぼ」と呼ばれる部分に誘導し閉じこめて漁獲する方法として知られています。エリとは、河や湖沼・内湾で、よしずや竹垣を魚道に迷路のように張り立てて、魚を自然に誘導して捕らえる定置漁具です。エリ漁は古くから伝わり琵琶湖のものが有名です。

2009年2月、ある寒い日の早朝、私は「守山湖友会」の戸田直弘さん、今江光夫さんおよび、浦谷善次さん達の組の船に乗せていただくために、守山にある岬船だまりに行きました。岬船だまりは守山漁業組合の管轄下にあり、琵琶湖大橋の近くにあります。

私が到着するとすぐに船は岬船だまりから出ました。船は、大きい船（長さ14m）と小さい船（長さ8m）の二隻があり、両方とも幅2.5mです。大きい船の上に魚槽（2m×2m×1m）、発電機、ランプが置いてあります。この船はガラス繊維からつくられており、とても安定しています。私たちが向かうのは第2種共同漁業権・第134号のエリです。このエリは海岸から長さ最大500mの距離にあり幅200mです。深さは7~9mです。

エリに着くと、二人の漁師は小舟に乗りかえて、その中に入りました。まず、エリの周りのバラスト（おもり）を引き上げました。一つをつぼの中に30個のバラスト（重さ8kg）が入っています。このバラストはつぼを固定するためのものです。戸田さんもバラストを引き上げながら、水を水槽の中に入れました。この水槽には、酸素を入れています。

獲った魚を入れる水槽の中は、大小の2つに仕切られており、各々の底に一番目の細かい網（目の直径2mm）がはってあります。そして、小さい水槽には細かい網の上に粗い網（目の直径15mm）の網が置いてあります。一方、大きな水槽には、中程度の目の網（目の直径7mm）が据え付けてあります。こうすると7mm以下の魚が選り分けられます。

バラストを引き上げて、今度は三人で小舟に乗りました。そして三人が一緒に網を引き上げました。引き上げた網は、片側に寄せました。小舟は大きな船に向かって同時に魚を同じ場所に集めているように見え

3. 発表者：小森 清喜（小森バイオ研究所）

4. 発表内容：「湖西・真野の暮らし今昔」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

ました。小舟と大きな船の近くで魚がたくさん集まる姿が見られました。エリの網の穴は3.5mmなので、小さい魚がたくさん獲れました。大きな魚も獲れました。コイとブラックバス以外の大きな魚はフナとビワマスです。コイはすぐに放ちましたがブラックバスは放してはいけません。1キロぐらいのコイが4匹獲れました。

戸田さんはエリから手ダモ網で魚を獲って、小さな水槽の上に張ってある粗い目の網の上に魚と水を流します。そうすると、大きさ15mm以上の大きな魚は粗い目の網に残り、小さな魚は小さな水槽の細かい目の網の中に入ります。小さな魚の多くは稚アユでした。

次はこの稚アユを手ダモ網で、大きな水槽に張ってある、網目の直径7mmの網に入れました。そうすると、7mm以上（もちろん15mm以下）の魚はこの網の中に残り、7mmより小さい稚アユはこの網を通過して2mmの網の中に選り分けられます。今度は7mmより大きなアユを棒間3.5mmのトオシ（通し）で二つのサイズに分けます。トオシとは昔からの道具で、これは魚に優しい道具です。魚が擦れないように工夫されているのです。稚アユの大きさは三つに分けられます。一番小さいものは「マッチ棒サイズ」と呼ばれ、その次の2つのサイズはおのおのタバコの半分ぐらいの大きさと中指（約10cm）の長さです。

このように、穴の目の異なった網やトオシを用いると、大きさの違う魚を簡単に選り分けられるのです。こうした魚をより分ける方法を「通しをかける」といいます。その意味は選り別ける選別作業です。この方法は、魚を網で傷つけないのです。私は、この通しをかける作業は、琵琶湖の漁師たちが、祖先から受け継いできたローカル・ノレッジの1つであると思いました。

エリのつぼは三か所にあります。二か所のつぼは大きく（外周は65m、深さは約9m）、残りのつぼは小さい（外周は50m、深さは7m）のです。三つのつぼから獲れた稚アユは計約35キロでした。その日、アユ以外で獲れた魚はフナ、ビワマス、ワカサギ、モロッコ、ゼゼラ、ハス、ヒガイ、ブルーギルとブラックバスでした。このエリというローカル・ノレッジを利用して琵琶湖の魚をたくさん獲ることができました。琵琶湖の魚を守るために、漁業におけるローカル・ノレッジを守るべきだと改めて感じました。



網をすり抜ける魚。